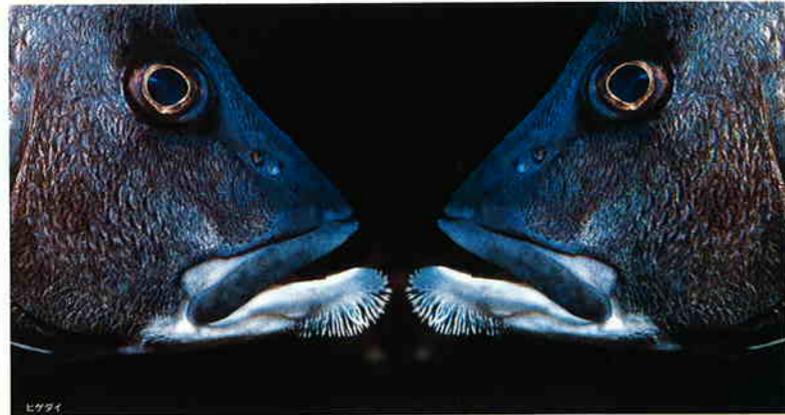


# 藻場

## 目次

海草と海藻.....	2	流れ藻は卵・稚魚のすみか.....	9
藻場.....	3	藻場の利用.....	10
藻場のはたらきと漁業資源.....	6	藻場は生きもの.....	11
藻場と餌生物と魚.....	7	藻場の保全は漁場の保全.....	12
海草・藻は海の牧草.....	8	海の緑をいつまでも.....	14

すみやすい海 海をきれいに



ヒゲダイ

水産庁・財団法人日本水産資源保護協会

水産庁 ● 東京都千代田区霞が関1-2-1 TEL 03-502-8111(代)(漁場保全課 内線5673)  
 社団法人 日本水産資源保護協会 ● 東京都千代田区永田町1-11-35 全国町村会館  
 TEL 03-593-2481



水産庁

社団法人 日本水産資源保護協会

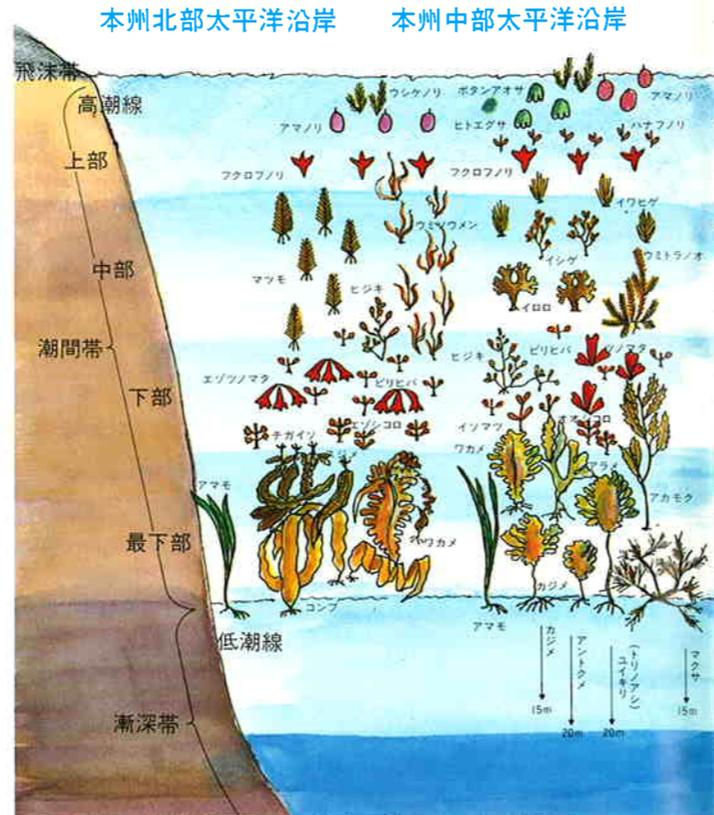
昭和62年3月

# 海草と海藻

野山に草木が茂るように、海にもたくさん植物が茂っています。花をつける海生植物を「海草」、花をつけない海生植物を「海藻」といいます。海草の代表はアマモですが、海藻は葉の色によって緑藻、褐藻および紅藻に分けられます。

海草や海藻が生えている深さは、大体30メートルより浅いところが多いのですが、光の強さの好みや乾燥に対する抵抗力などの違いによって、種類別のすみ分けがみられます。

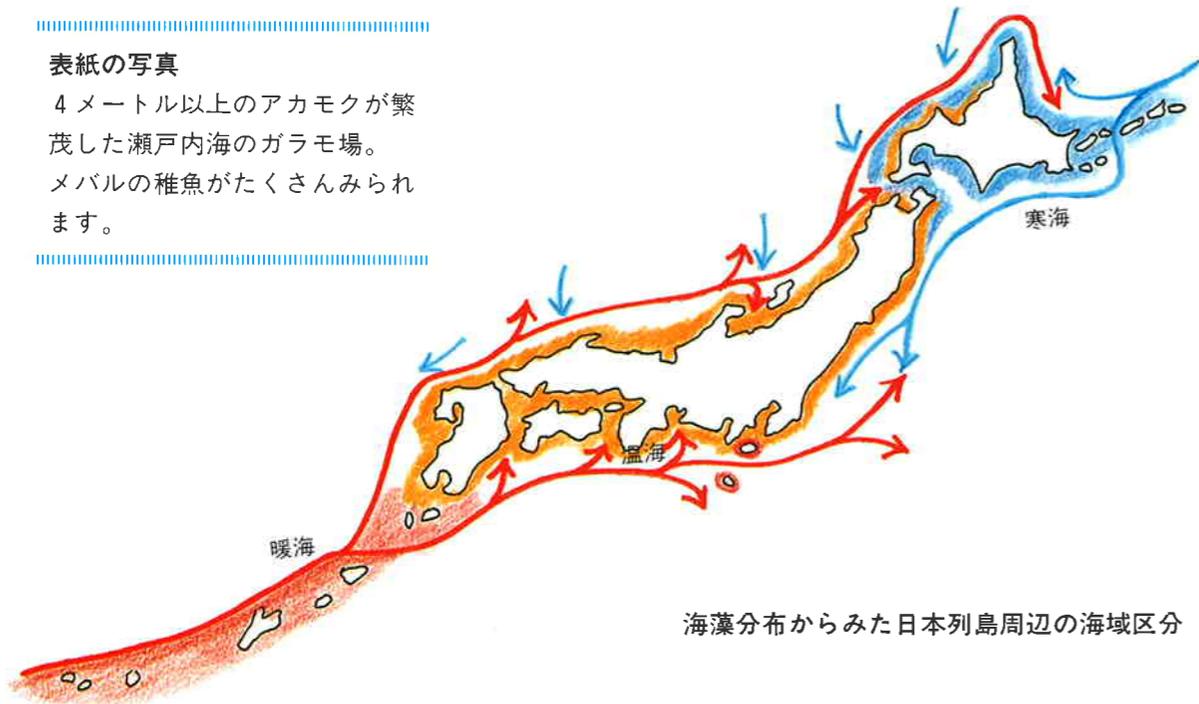
南北に長い日本列島では、気候や海流の影響で生育している海草・藻の種類が地方によって違います。寒い海には褐藻が、暖かい海には緑藻が多くなる傾向があり、海生植物分布の様子からみますと、日本列島のまわりの海は、寒海、温海および暖海に大別できます。



本州太平洋沿岸における海草・藻類の鉛直分布模式図

## 表紙の写真

4メートル以上のアカモクが繁茂した瀬戸内海のガラモ場。メバルの稚魚がたくさんみられます。



海藻分布からみた日本列島周辺の海域区分

# 藻場

海草や海藻が群落を作って生育しているところを「藻場」といいます。アマモが生育しているところをアマモ場、ホンダワラ類が生育しているところをガラモ場といいます。アラメ、カジメ、コンブなどが生育しているところを、ここではケルプ場と呼ぶことにします。

## ガラモ場

ホンダワラ類は全長5メートルを越えるものもあり、気泡で水中に立ち上がっています。多くは多年生で北海道を除く日本沿岸の岩礁地帯に広く分布しています。春～秋に特別の小枝が伸びて卵と精子をつくり、受精した卵が母藻を離れ、岩に着生して育ちます。



## ケルプ場

コンブは東北から北海道の寒海に、アラメ、カジメは東北以南の温海に分布しています。いずれも夏～秋に成熟し、無数の泳ぐ胞子を放出します。胞子は岩に着生し発芽して微小な糸状体となり、それに精子と卵ができ、受精卵が発育して大型の葉体になります。コンブは2年以上アラメ、カジメは5～6年生きます。



アマモ場

アマモは株分れと実生（種子から育つこと）との両方で増えます。新芽は秋から伸び始め、古くなった葉から枯れ落ちる一方で、新しい葉を伸ばしながら冬～春に成長し、春に花を咲かせます。その後は衰退期に入り、夏にはまとまって枯れます。



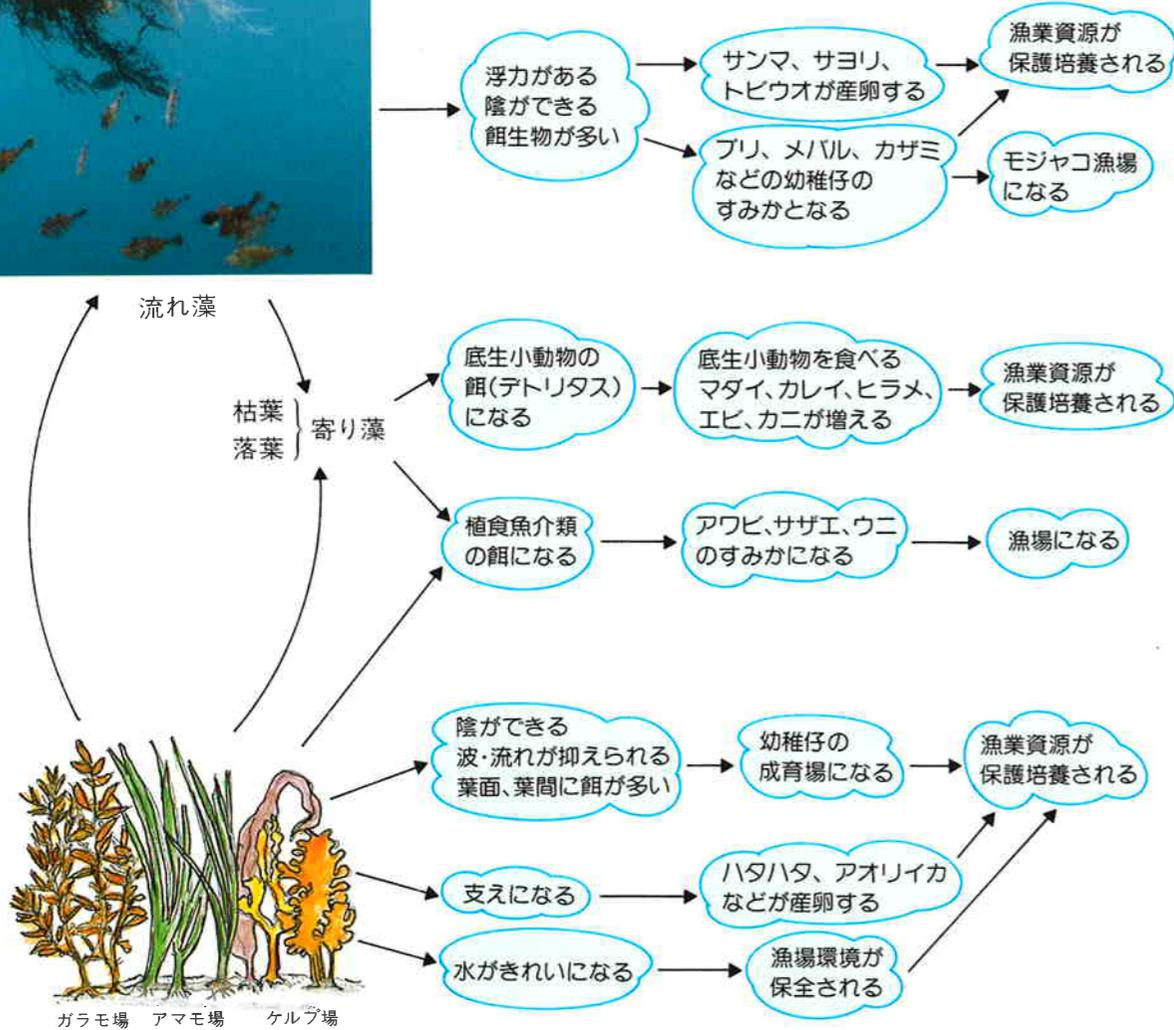
アマモの雌花



アマモの枯葉

# 藻場のはたらきと漁業資源

# 藻場と餌生物と魚

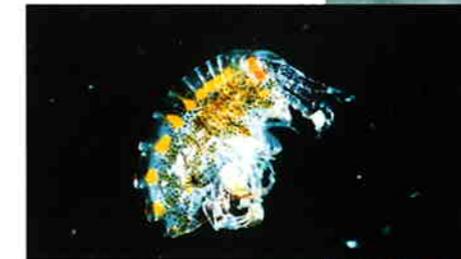


藻場は、波や流れが弱く、隠れ場になる物陰があり、葉面に着生したり葉間を泳ぐ小動物がたくさんいるので、魚介類の幼稚仔にとっては絶好の生育場になっています。藻場で育った魚介類は、大きくなると沖の漁場へ移動し、漁獲対象になります。

餌生物

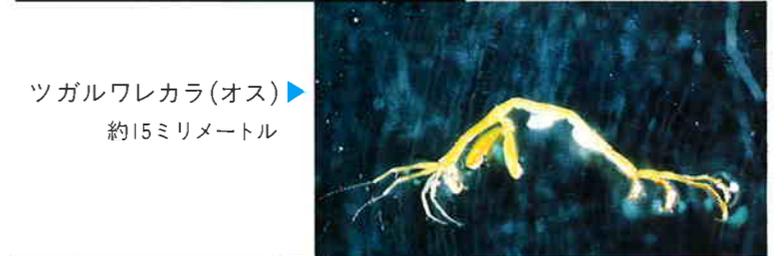


ニッポンモバヨコエビ  
約15ミリメートル



ヨコエビの一種  
約3ミリメートル

藻場をつくらしている海草・藻の葉面には、たくさんの付着珪藻や小動物が着生しています。主な着生動物は、ヨコエビやワレカラなどの甲殻類、小型の二枚貝と巻貝およびゴカイの仲間です。また、アマモやガラモの葉間には、小型のアミ類がたくさんみられます。これらの小動物は、いずれも有用魚介類の優れた餌になります。



ツガルワレカラ(オス)  
約15ミリメートル



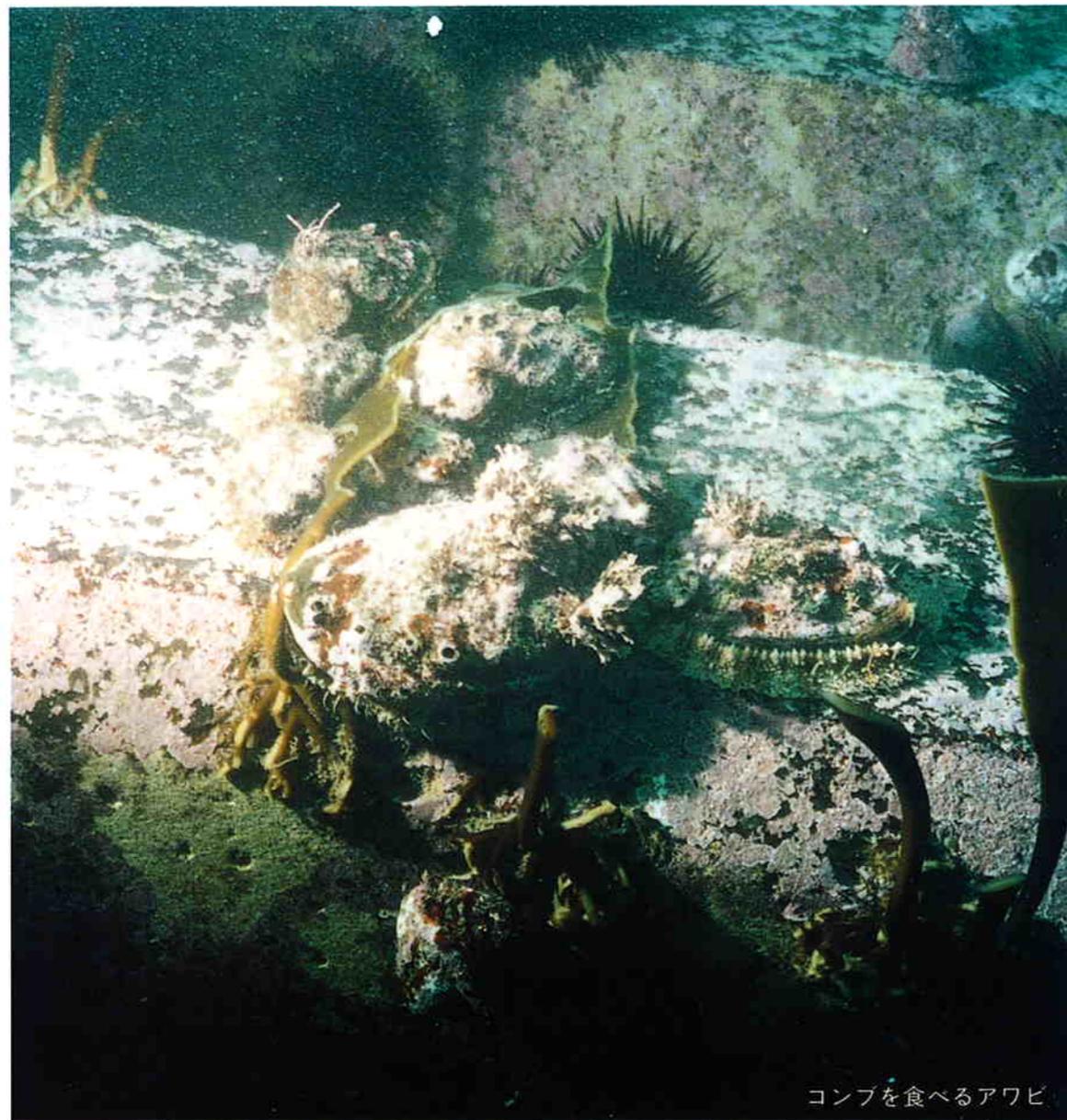
トゲワレカラ  
約17ミリメートル(オス)  
約10ミリメートル(メス)



## 海草・藻は海の牧草

コンブやアラメ、カジメなどは、直接アワビ、サザエ、ウニの餌になります。アワビが1キログラム増えるためには、アラメなら15キログラムも食べなければなりません。そこでアワビを増やすために、藻場造成が各地で行われています。

海草・藻の落葉や枯葉は、漂流して海底のくぼみや流れのゆるいところに溜まります。これを「寄り藻」といい、アワビなどのよい餌になります。寄り藻は、バクテリアなどの作用を受けて分解し、もとの無機物に戻っていきます。枯葉などが分解途中のものはデトリタスと呼ばれ、底生小動物の餌になり、さらにそれを有用魚介類が食べて育ちます。

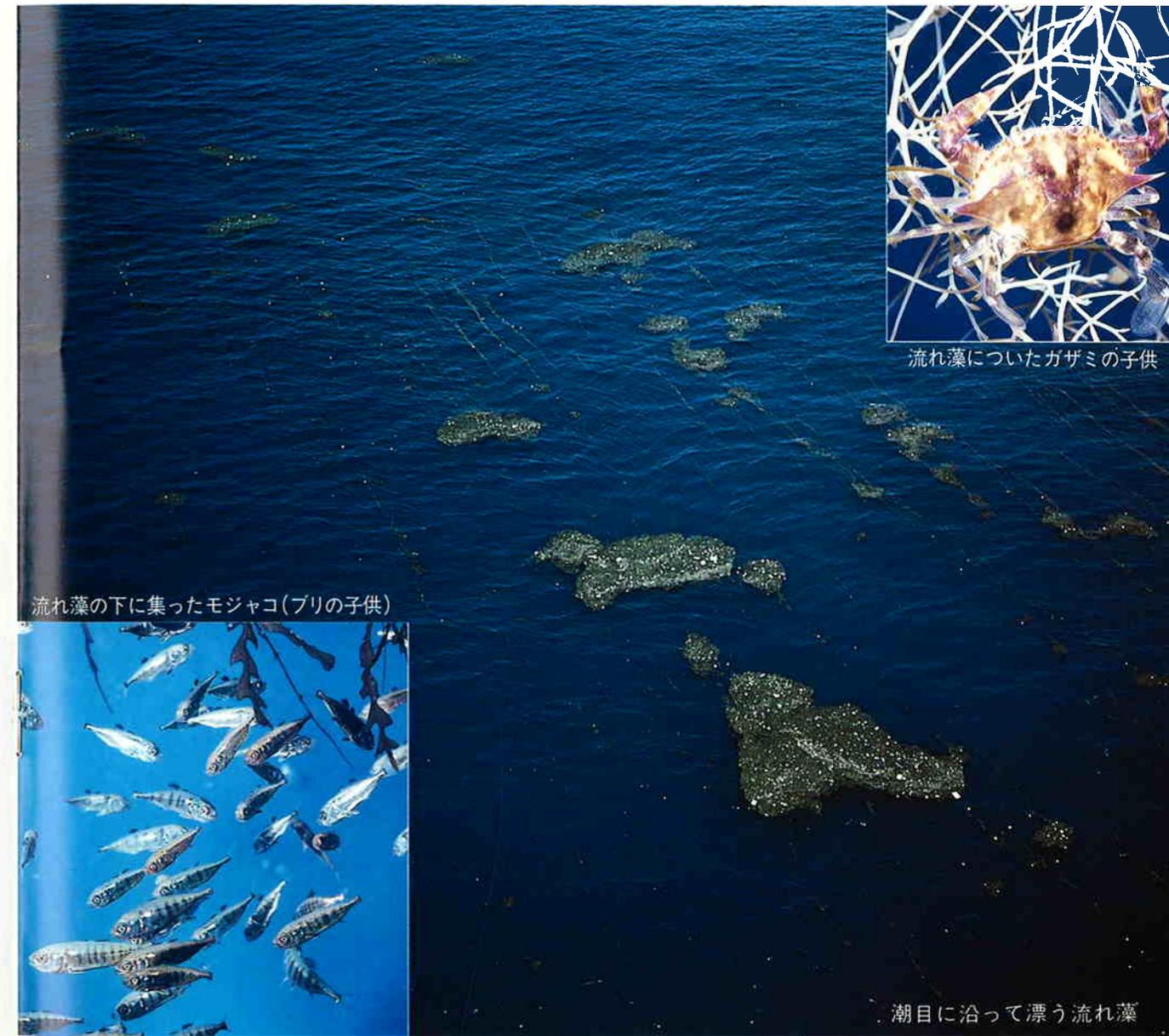


## 流れ藻は卵・稚魚のすみか

流れ藻になるのは、ホンダワラ類が多く、主に、春先から夏の成熟期に多くみられます。潮のまにまに漂って、1日10キロメートルぐらいの速さで動きます。

流れ藻の寿命は、太平洋側では荒波にもまれるため1～2週間くらいですが、日本海側ではおよそ2ヵ月にも及び、北九州の岩礁からちぎれてできた流れ藻が秋田沖までとどくこともあります。

卵・稚魚が流れ藻につく魚類は100種以上も知られていますが、中でもブリの稚魚であるモジャコがよく知られています。まき網やたもですくって、ブリ養殖の種苗に利用されます。



# 藻場の利用

アワビ、サザエ、ウニなどは、藻場が直接漁場になります。

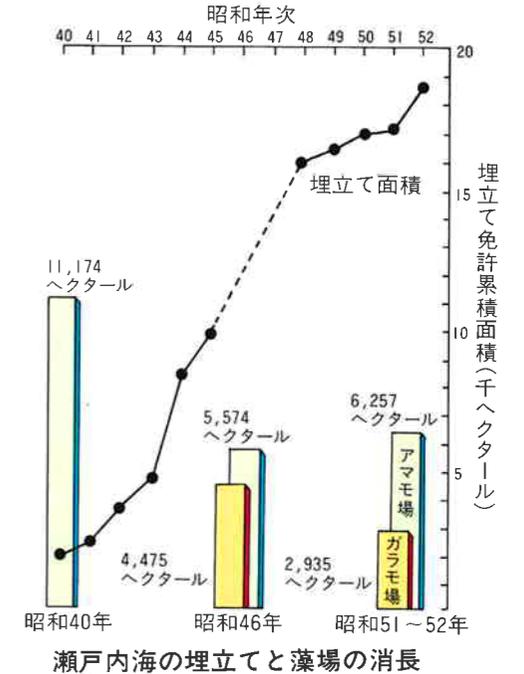
しかし、素もぐりやかぎとりで漁獲されますので藻場を傷めることはありません。また、資源の保護・管理のため、どこでも大変厳しい採捕規制や密漁防止対策が行われています。

北海道の野付湾のアマモ場では、明治時代から帆打瀬網によるホッケイエビ漁が行われていて、今でも道東地方の風物誌になっています。



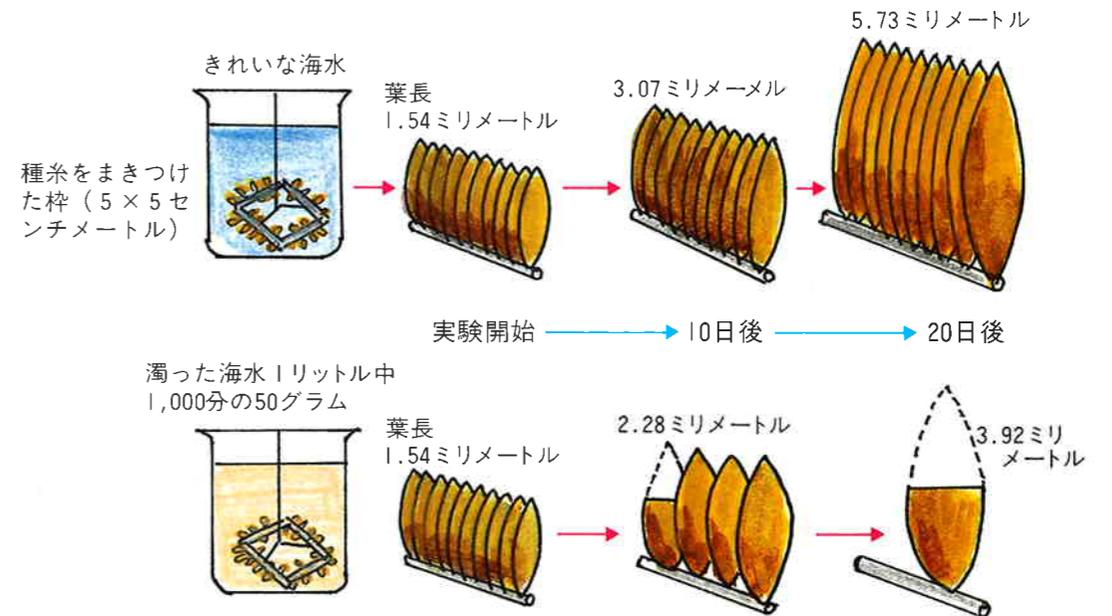
# 藻場は生きもの

藻場がある浅い海は、工場、発電所、港湾、空港の建設などさまざまな産業活動の場としても利用されています。例えば、瀬戸内海の藻場は、埋め立ての進行に伴って少なくなり、アマ



モ場は昭和40年から46年までのわずか6年間でおよそ半減したといわれています。

埋め立てのほかにも、海水の濁りで光量が不足したり泥が葉面を被覆すると、草や藻が弱り、藻場が消えていきます。藻場は生きているのです。



濁った海水中ではカジメの幼芽は育ちが悪く枯れるものが多くなります。

(資料：徳島県水産試験場)

# 藻場の保全是漁場の保全

## 保護水面の設定

藻場は、水産資源を保護培養するのに大変重要な役割を果たしていますので、国でも地方自治体でも、その維持・増大のためにさまざまな努力をしています。

例えば、水産資源保護法に基づく藻場保護水面が全国34ヵ所（総面積 約1,669ヘクタール）に設けられています。

これらの保護水面では、水産動植物の採捕が制限または禁止されており、埋め立てや浚渫などの工事も厳しく制限されています。



藻場保護水面が設けられているところ

(資料：水産庁 昭和61年現在)



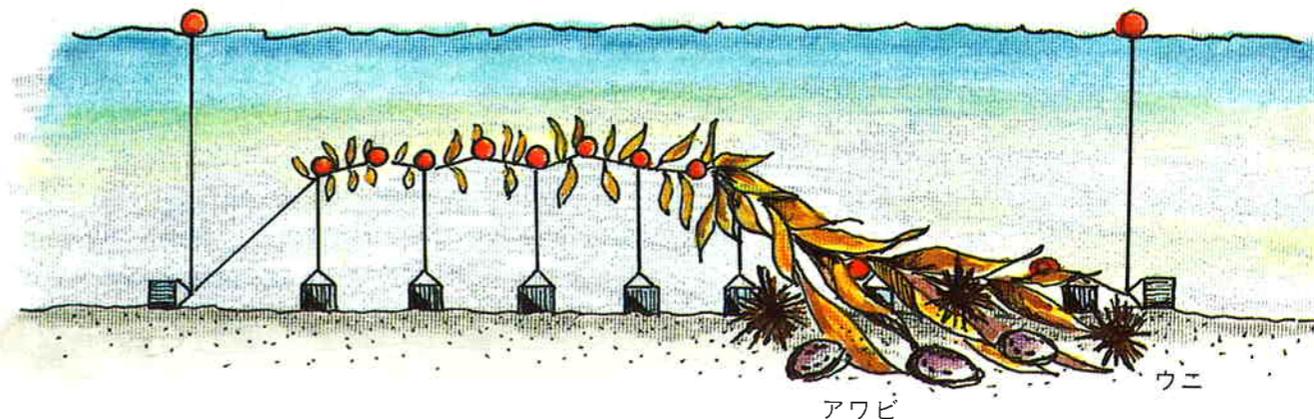
## 藻場造成

藻場造成には、大別すると、魚介類の産卵や生育場づくりを目的とする「生活圏藻場」の造成と、アワビなどの餌を増やすことを目的とする「餌料藻場」の造成とがあります。

瀬戸内海では、コンクリートブロックを種糸または母藻と一緒に海底に沈めてガラモ場を造成しています。造成した藻場は、そのままでも魚介類のすみかになりますが、種苗放流と組み合わせるともっと効果的に魚介類の増産を図ることができます。

東北地方では、アワビ、ウニの餌として、コンブによるケルプ場を延縄式施設で造成しています。この施設は、コンブが幼芽のうちは海の中層で育ち、大きく成長すると重みで自然に海底に沈み、アワビ、ウニに食べられるように工夫されています。食べ残しのコンブからは胞子がでて、翌春は付近の海底一面にコンブが生えてきます。

## 餌料藻場(ケルプ場)の造成



# 海の緑をいつまでも

山には森林、野には草木、海には草や藻があってこそ、自然は豊かだといえるのです。

山野の緑が動物達にすみかを、人の心に安らぎをもたらすように、海の緑は豊かな魚介類を育てます。

藻場は魚介類のふるさとなのです。海の緑をいつまでも、海の恵みをいつまでも、それが私達の願いです。

